



〈憲法は、だれのもの?〉

ジャーナリスト
松本侑壬子

東日本大地震から五年。福島原発・放射能問題は未解決のまま、四月には新たに熊本で大地震が起きた。それでも稼働中の原発を止めない政府の政治的判断が不気味だ。原発、安保、憲法：「政治」は難しくてわからない、などとも言うってはいられない。

この夏の参議院選挙を前にひと際憲法論議が高まるなかで、一般市民の視線で憲法を考えるドキュメンタリー映画『不思議なクニの憲法』（松井久子監督）が完成した。「憲法には『個性としての』私がどう生きるか」が書いてある」という視点から、憲法論議を政治家に任せるのではなく、主権者である国民一人ひとりがもっと憲法を知り、私たちの暮らしはどうあるべきかを考える意識が高まってほしい、というのが松井監督の狙い。

もともと『ユキエ』『折り梅』『レオニー』など劇映画で女性にファンの多い同監督だけに、「憲法」や「戦後史」といっても議論よりも何かしら人間の体温の伝わるドキュメンタリーだ。

映画に登場する約三〇人は、十代の高校生から九四歳の作家まで、年齢職業、住所、立場も多種多様。若い世代では、安保法案に反対する活動家ママ、子育て中の女性弁護士。「本土に（来て）米軍基地のない生活が可能なのとを初めて知り衝撃を受けた」沖縄出身の学生。一人で反戦デモを始めたが、「化粧してデモして何が悪い」と訴え仲間が増えた、というフリーター女子も。

九四歳の瀬戸内寂聴さん、八六歳の元文部大臣・赤松良子さんの戦後憲法（男女平等規定）とともに開けた人生の体験的憲法論、戦後憲法が出来た時は子どもだった世代女性（七〇、八〇歳代）の子どもにとつての憲法の思い出も。それらは、憲法学者・長谷部恭男早大教授、元外交官／評論家・孫崎享さん

らの日米関係、日本の戦後史についての解説を聞き、当時のニュース映像や画像を見れば、単なる思い出の枠を超えて日本の戦後史の中でどんな位置にあったのが、愛おしいほどにわかってくる。

既に見たことのある昭和の記録画像の断片が、意味をもつてつながってきて興味は尽きない。そして、戦後七〇年間、日本が戦争だけはしないで来ることができたのは、戦争放棄をうたう憲法のあるおかげだったのだと、改めて実感できる。

本作には憲法問題で「右か左か」といった政治的メッセージ色は抑え、また「改憲か護憲か」と論争する前に、まず歴史の事実を学び「一人ひとりが個として守られる自由な社会で暮らすには」を考えるためのわかりやすいヒントがたっぷり含まれている。

「憲法って、なに？」の基本と現実の問題を考えながら、それぞれの世代が生きてきた戦後史を丁寧に辿っている。日本の戦後史はこれまで学校教育でも不十分であったが、その意味でも若い世代が日本のこれからを考えるよき手がかりとなるだろう。そして「憲法は、だれのもの」かも。

公開中
10人以上の小グループでの自主上映も可。
問い合わせは、(株)エッセン・コミュニケーションズ (FAX:03-3523-0212) まで
©ESSEN.COMMUNICATIONS

『不思議なクニの憲法』

ドキュメンタリー映画 (122分)

監督：松井久子

出演：瀬戸内寂聴、赤松良子、長谷部恭男、孫崎享
三浦陽一ほか

公開中

10人以上の小グループでの自主上映も可。

問い合わせは、(株)エッセン・コミュニケーションズ (FAX:03-3523-0212) まで

©ESSEN.COMMUNICATIONS

